

コミュニケーションから ファシリテーションへ

—アクティブラーニングの社会理論の試み—

井上義和(帝京大学)
inouey@main.teikyo-u.ac.jp

日本教育社会学会第70回大会 課題研究Ⅲ「アクティブラーニングの教育社会学」公開研究会 2018.11.6東京大学

1

0. 本報告のねらいと、私の立場

- ① アクティブラーニング(以下AL)の名の下に進行している事態とは？
- ② 初等中等教育のALと**高等教育のAL**を区別、後者を取り上げる。
- ③ 教室の内と外、教育(方法)学の内と外、教育の内と外の関係に着目。
- ④ 私の立場→「気持ち悪いけれど、**不可避**であり、むしろ**役に立つ**」

2

1. 「能動的な学修」の教室内化——教室の内と外

- 教授者中心パラダイム
 - 教室内での、教師から学生への一方向的な知識伝達
 - **教室外での**、学生側の「能動的な学修」による**補完**
 - 自学自習、シケ対ネットワーク…
 - **放任的自由**
- 学習者中心パラダイム
 - 学習のプロセスを授業設計に組み込み、運営・評価まで教師が掌握
 - 「能動的な学修」の**教室内化**
 - 隠れたカリキュラムの**カリキュラム化**
 - **設計的自由**

都合のよい補完システム！

←教師は関知しない

3

2. 個人の能力や主体性を前提にしない参加型の仕組み ——教育(方法)学の内と外

- 「知識優位からコミュ力優位への転換によって、抑圧／排除されるのは誰か」という問題(学生)の前に…
- 「**都合のよい補完システム**」の**機能不全**、という問題(教師)
 - 「教室外で勝手に補完してくれる」という想定が成り立たない
 - 教育困難大学から直面、**教育(方法)学の外で試行錯誤**
 - 学習＝学修のプロセスを教師が設計・管理する必要へ
- **コミュ力**を前提にせず、**コミュニケーションを促進する環境設計**
 - 学生個人の能力や主体性(コミュ力含む)は前提にできない…
 - 環境設計 → コミュニケーションの促進 → 知識の理解・定着

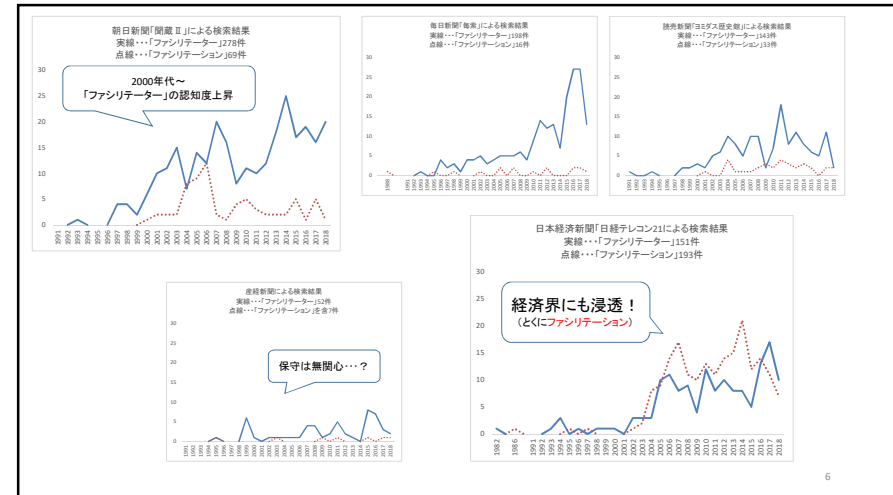
1990年代末～
2000年代半ば

4

3. ファシリテーションの時代——教育の内と外

- 「**コミュニカ頼みの限界**」問題
 - 1990年代末～2000年代半ばに、教育の外で起こった変化
 - さまざまな領域で、組織の枠を超えた共同事業が活発に →しかし…
- コミュニケーションをめぐる問題設定が転換
 - 個人の能力(コミュニカ)ではなく、場の設計・運営の技術
 - **ファシリテーション機能**への注目
 - 動詞facilitate 促進する、助長する、容易にする
 - ファシリテーター(人)、アーキテクチャ(空間)、アクティビティ(技法や仕掛け)

5



6

4. おわりに

——ファシリテーションは「自由な主体」を育てられるか？

- 問い: ファシリテーターなしでも、「自由な主体」でありうるか？
- 答え: **すべての個人が「自由な主体」になるのは困難。しかし…**
 - 小集団なら**ファシリテーション次第**で「自由な主体」を出現させることは可能
 - ただ、すべての人がファシリテーターになる必要もない。しかし…
 - 設計的自由を回せる**エリート・ファシリテーター**を育てることは可能
 - 場所や主体への要求水準が低いのが、設計的自由のメリット

7